

説教題 「神のあわれみ」

私の伝道者生涯を突き動かした聖書の 2ヶ所を今日の説教箇所を選びました。ルカの福音書 10 章と 15 章です。良きサマリヤ人のたとえ話と見出された一匹の羊のたとえ話です。

まずルカの福音書 10 章からです。

25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」

* 大変興味深い質問です。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるとおもいますか。

26 イエスは言われた。「律法には、何と書いてありますか。あなたはどの読んでいますか。」

* イエスは律法の専門家の問いに対して問い返しておられる。分かっていながら質問するところに試しがあります。

27 すると彼は答えて言った。『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ』、また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』とあります。」

* この二つが律法の要約です。すべては二つに帰することになります。二つに共通する言葉は愛せよです。

28 イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」

* 知っているだけではだめです。言行一致が必要です。御言葉と信仰生活が一致するように、イエスの教えに従うことが神を愛することです。

29 しかし彼は、自分の正しさを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」

* これは自己義です。

30 イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎ取り、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。」

* この下る道はおよそ 25 km 標高差 1100 m 強盗のよく出る道です。

31 たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。

* 祭司は神殿に仕える人で反対側は関わろうとしないことを強調する表現です。

32 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。

* レビ人は祭司に仕える人で、下働きをする人です。レビ人も同じように反対側を通り過ぎて行きました。イエスは神に仕える立場の人が困難の中にある人に対して自分の安全と家に帰ることを優先して困難の中にある人と関わろうとしない姿勢を取り上げて、当時のパリサイ人や律法学者が罪人とされる人と関わりを持たないで過ごそうとする姿勢をたどっておられます。

33 ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、

*当時ユダヤ人はサマリヤ人を差別していました。このたとえ話はユダヤ人の同胞が助けるのではなく、ここでは差別されているサマリヤ人がユダヤ人を助けています。

34 近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。

*問題の対応には短期・中期・長期の対応が必要です。私の生涯の取り組みである救出やカウンセリング、支援活動はこの教えから学びました。短期の緊急対応は傷にオリーブ油とぶどう酒と書いてあります。

35 次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』

*中期対応は宿泊費と介抱代金を宿屋の主人に払いました。デナリ二つは二日分の労賃です。 長期対応は、もっと費用が掛かったら、私が帰りに払いますと言っています。

36 この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。』

*イエスは、私の隣人とはだれのことですかと聞いた律法学者に、逆にだれが隣人になったと思いますかと尋ねておられます。私を中心にしてだれが私の隣人かではなく、困難中にある人を助ける人がよき隣人であることをここで教えておられます。私たちがこれから取り組むこの困難にあっている人は身内とは限りません。まったくの見ず知らずの人かもしれません。しかし、問題に直面している人に関わることによって、彼、彼女、あの人、あの人たちから、私たちになるのです。短期、中期、長期に関係を続けることによって、私たちの絆は深まり強くなり困難を乗り越えて行けるようになるのです。物理的な隣人ではなく、心に寄り添う隣人となるのです。

37 彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って同じようにしなさい。」

*ここでサマリヤ人とは言っていない。同じような冷たい言い方は、放蕩息子の兄が自分の弟のことをおとうさんに対して、あなたの息子、と言っている箇所です。

*イエスは永遠のいのちをえるために愛の実践を説いています。律法全体を守る人はひとりもいません。「義人はいない。ひとりもない」(ローマ3:10)しかし、イエスを神の子キリストと信じるなら永遠のいのちを得ることになります。イエスは律法の専門家たちから、また当時のユダヤ人から罪人とされた人々を救い、食卓を共にし、喜びを共にされました。イエスはあわれみの大切さをここで教えておられます。律法の専門家に対してだけ語られたものではありません。この教えがこのようにして記録され、私たちのところに届いているのは、私たちにとってもあわれみが大切だからです。イエスは「あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。」(ルカ6:36)」と教えられました。よきサマリヤ人のたとえ話はそのあわれみを分かりやすく説かれた教えです。ルカの福音書10:37では律法学者はこう言いました。「その人にあわれみをかけてやった人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って同じようにしなさい。」 私たちも行って同じようにしようではありませんか。

私の44年間の伝道者牧師の生活はこの教えの実践です。異端やカルト、カルト化した教会や教会の内部の問題で、打ちのめされ、傷つき、倒れ、心身ともに病気になり、経済的にも大きなダメージを受け、死にたい思いに駆られ、途方に暮れておられる日本中の方々からの連絡があります。これらの要請に応じて私は自分が遣わされた教会のことはおよそ2割、残りの8割は教会外の方々の被害者やその家族への対応で過ごしてきました。七條基督教会は私を迎える前に会議を開き、異端救出の働きを受け入れてくださいました。やがて宗教トラブル相談センターを教会内に設置することも認めてくださいました。こうして、神様が私に与えてくださった使命を受

け入れ支えてくださったので、私は今日までこの働きをしていくことが出来ました。それと、私の家族の理解と協力を加えておきます。大きな事件が起きたときはマスコミからの連日連夜の電話が殺到します。家族がその対応に協力してくれました。さらに、教会員ではない方々も、私の使命と働きを理解し、祈り捧げ、支援してくださいました。このような方々が日本中におられます。心から感謝しています。ありがとうございました。

昨年9月30日、私は体の不調で医師にかかり、その日に入院し手術を受けました。すい臓がんに伴うすい臓肥大で膵管と胆管が狭くなり、膵液が十分流れなくなって糖尿病と胆道閉そく症で胆汁が十分流れなくなり毒素が体中に逆流するようになりました。その後、すい管炎、さらに急性肝炎を併発しました。急性肝炎は麻酔薬の薬害で肝臓の数値が命に係わるレベルまでになり、治療の施しようのない状態となり、経過観察をするしかありませんでした。死の宣告に等しい状態になり、無理を承知で退院を強引に申し出、自宅で安静に10日間過ごしました。その間、家族会議を開き、告別式の準備を進め、告別式の司式者とも打ち合わせを済ませ、私の銀行口座から預金を引き出し、遺言書を書き、私の持っているものは家族に分け与え、いつ天に召されてもいいように対応しました。ところが、多くの方々の祈りによって、退院10日後の検査で正常値に回復していました。その後1か月の間、全国から100名を超える方々が面会に来られ、励ましてくださいました。3月20日の召天者記念礼拝では召天者側になるところでしたが説教をすることができました。主の恵みにより、無事3月末をもって引退しました。4月5日には70歳の誕生日を家族が祝ってくれました。そして、今日の引退記念礼拝に多くの方々が馳せ参じてくださいました。私は幸せ者です。今は静養の期間ですが、相談には対応を続けています。相談は私の生涯追っかけてくることでしょう。それにも優って、神のいつくしみと恵みは、私を追っかけて追っかけて追っかけてきます。これは深い神のあわれみです。

次はルカの福音書 15 章からです。

1 さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。

*この人たちこそ、かつては失われていたが今は見出されたアブラハムの子供たちです。迷子になっていた一匹の羊です。

2 すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」

*パリサイ人や律法学者たちは罪人とされている人々と一緒に食事をする習慣がありません。自分を正しいと思っている人で律法の教えを守らずに暮らしている人たちを見下して生活していました。

3 そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された。

*たとえば分かる人には分かり、分からなければ、真摯に尋ね求めるならば、意味を教えてもらえる話です。

4 「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一只をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一只を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。

*当時の羊飼いは数人で羊の世話をしていました。羊が迷子になったら誰かが迷子の羊を探しに行きました。イエスは大変身近なことをたとえにしておられます。

5 見つけたら、大喜びでその羊をかついで、

*かついでと話しておられるところから、迷子の羊がどれだけ命の危険にさらされて憔悴しているかが推測されます。

6 帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください』と言うでしょう。

*イエスは罪人と言われている人たちがイエスの下に集まり、その教えを聞き、神のもとに帰ってきたことを喜び、ともに食事をしておられることをここでたとえておられます。

7 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。

*99匹の羊が無事だったことより、迷子の一只の羊が見つかったことの方が、まさる喜びであることはその通りです。

私は20歳の時、異端の教えに惑わされ迷子になっていた羊でしたが、真の羊飼いであるイエス・キリストによって救われました。イエス・キリストが私を探して救ってくださいました。その後、私は牧師に召され、宗教問題で迷子となって悲惨な状態にいる羊をイエス・キリストと共に探し求める生活をしてきました。多くの方々が私と同じようにイエス・キリストによって救われました。そして安息を得ました。私たちが今日を共に迎えることができたのは、神のあわれみです。真の羊飼いであるイエス・キリストのあわれみです。「あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。」(6:36)とイエスは教えられました。あわれみを受けた私たちも、共に迷子になっている羊たちにあわれみ深くしようではありませんか。七條基督教会における宗教トラブル相談センターは私の引退後も継続されます。私は引退しますが、今後も私はこの働きに協力し、天に召されるまで、宗教問題で傷つき困難の中にある方々の回復と支援に取り組んでいきます。